

# 系統的なリタラシー指導が含まれた公立小学校での 英語教育カリキュラム

## English Curriculum with Literacy Activities at a Public Elementary School

アレン玉井光江

Mitsue ALLEN-TAMAI

青山学院大学

*Aoyama Gakuin University*

### Abstract

The Ministry of Education, Sports, Science, Culture, and Technology publicized the “English Education Reform Plan corresponding to Globalization” in 2013 and displayed its determination to promote the establishment of an educational environment corresponding to globalization from the elementary to lower and upper secondary education stages. According to this reform plan, English language classes will be a regular subject for upper graders at public elementary schools from 2020. In this paper, the author presents a two-year English curriculum for upper graders including some literacy teaching, corresponding to the recent reform ideas. This curriculum has been practiced for five years in a special district where English has been taught as a subject and students’ English skills have been evaluated. The effects of the program and the reactions from homeroom teachers are reported on.

### Keywords

Literacy Instruction, Public Elementary School, Curriculum

#### 1. 教科化に向かう公立小学校の外国語活動

文部科学省(以下、文科省)は2013年12月13日「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表し、「初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育拡充の強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る。」とする基本方針を打ち出した。具体的には公立小学校では小学校中学年より活動型のクラスを週1～2コマ程度設け、コミュニケーション能力の素地を養い、小学校高学年では専科教員を積極的に配置しながら教科型のクラスを週3コマ程度設けることにしている。また具体的な実施に関しては、小学校英語教育推進リーダーの加配・養成研修、専科教員の指導力向上、小学校学級担任の英語指導力向上、研修用映像教材等の開発・提供、教員養成課程・採用の改善・充実などを中心に2014年度から強力に逐次改革を推進することになっている(文

科省，2014)。

実際，2014年度文科省は英国の公的な国際文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシルに英語指導力向上事業「英語教育推進リーダー中央研修」を委託し，英語教育指導者への研修を2014年5月12日より開始した。2014年度の研修対象は，各都道府県より推薦を受けた各学校段階における外国語(英語)担当教員約500名(小学校200名，中学校200名，高等学校100名)である。具体的には研修は1回50人で，25人を1グループとし，各グループに対し英語講師2名が担当することになっており，5日間の研修を年に2回受けることになっている。研修を受けた教員は文科省より「英語教育推進リーダー」として認証され，地域の英語教育を推進する役割を担うことになっている。筆者は研修に参加した小学校教員より「研修は大変有意義であった」との感想を聞いたが，都道府県により研修を受ける教員の数異なり，中には1名しかいない県もあると聞いた。

さらに文科省は2014年度5千万円以上の予算を組み，英語教育強化拠点地域事業において小学校における英語教育実施学年の早期化，教科化，指導体制の在り方や中学校における英語による英語授業実施等，初等中等教育を通じた系統的な英語教育について検討することになっている。今年度その研究学校として1道1府14県1市より102校の小学校，中学校，高校が指定を受けた。

1992年に実験的に公立小学校に英語活動が導入され，28年という歳月を経て，2020年度から小学校の英語活動は高学年で教科となる予定である。しかし現在行われている外国語活動の目標は「外国語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を養う」(文科省，2008)となっており，コミュニケーション能力を伸ばすことを第1の目的としている。従って公立小学校で行われる授業は英語の言語スキルを伸ばすことは目的ではなく，異なる文化や言葉に対して興味や関心を持ち，コミュニケーションをとりたいという気持ちを育てることがその主たる目的である。そのため言語スキルの発達も含めた英語教育に取り組んでいる公立小学校の数は大変少ない。本論文においては教科とされる公立小学校高学年の「外国語科」においてどのような英語教育が可能なのかを念頭に，筆者が考案したプログラムとその実践について報告することを目的としている。

## 2. 公立小学校における英語教育の実践

### 2.1 研究サイト

研究の対象となる小学校(これ以降 A 小学校と記載する)がある地域では，平成15年度より「構造改革特別区域研究開発学校」制度を利用して英語教育を始め，平成20年度以降は「教育課程特例校」制度を使い，特殊な英語学習環境を整えている。公立の小学校としては珍しく1年生から週に1回の英語の授業があり，英語は教科として取り扱われている。A 小学校はこの地域の中で，特に積極的に英語教育に取り組み，地域を牽引する存在である(アレン玉井，2014)。

## 2.2 A 小学校における英語教育の目標

A 小学校において筆者は英語教育アドバイザーとして関わりつつ、5年にわたり学級担任とともに高学年の児童に英語を教えている。A 小学校における英語の授業では他教科同様に「学び」を大切にした **learning-centered** のクラスを心がけている。意味のある文脈の中で英語に接することを大切に、また音声言語だけではなく適宜リタラシー指導を積極的に組み入れている。目標は以下のようなものである。

- ① 英語の時間も他教科と同様に学びを積み上げる時間であると児童が認識する。
- ② 英語が国際共通語としてこれから自分にとって大切な言葉であると児童が理解する。
- ③ 自律した言語学習者として自分の学習に責任を持つ。
- ④ 言語能力に対して自己評価ができ、言語学習に対して基本的な振り返りができる。
- ⑤ 英語を通して他国の人や文化などを知ろうとする態度を育成する。

## 3. A 小学校での英語カリキュラムとレッスンプラン

### 3.1 フレームワークとルーティンを大切にしたいカリキュラム

A 小学校での英語カリキュラムの特徴に Bruner (1978) の提唱したフレームワークとルーティンという考え方がある。Bruner (1983) によると何かを学ぶためには適度な社会的な交わりを確保するフレームワークが必要であり、そのフレームワークの中で繰り返される活動が **Scaffolding** (足場) と呼ばれる最適の学習サポートを与えることができるのである。Cameron (2001) も説くように、学習者が恐れず、慣れ親しみを深め、予測しながら言語に接することができるように、フレームワークとルーティンを意識して用意し、適度な足場を作ることを試みた。

したがって著者が開発したカリキュラムでは、通常行われているように単元を決めて、その時間内である特定の語彙や表現などを習得させるという流れではなく、大きく枠組みを決め、その中で同様の活動を繰り返しながら1学期、半年、または1年という長いスパンで児童の英語の発達を促す方法を取った。学年によって多少内容は異なるが、下記が代表的なフレームワークである。このフレームワーク内ではルーティン活動がほとんどであるが、ルーティン活動の否定的な側面は学習者を飽きさせることである。本カリキュラムではおおよそ8割の活動を繰り返し2割程度変化させるようにして、学習者に安心感と適度な緊張感を与えるように進めている。

それぞれの活動について少しここで説明を加える。まずは①と⑥の挨拶であるが、その日の日直が **today's leader (s)** として教室の前に立ち、担任と **JTE (Japanese Teacher of English)** である筆者に向かい、「Stand up, please. Say “hello” to Mrs. Allen. Say “hello” to Ms. (担任教員の名前). Sit down, please.」と指示を出し、残りの児童はその指示に従い、「Hello, Mrs. Allen. Hello, Ms. ○○.」と言う。授業後の挨拶は「Stand up, please. Say “thank you” to Mrs. Allen. And say “good by” to Mrs. Allen. Sit down.」となる。

表1 英語教育カリキュラムにおけるフレームワーク

学習活動	内容
① 挨拶	
② 歌	高学年は歌詞を読む活動も含まれる。
③ リタラシー活動	アルファベットの文字認識、音韻認識能力の発達、フォニックス指導などボトムアップ的な指導。
④ CLIL <sup>1)</sup> 的な活動	話に関連させたテーマを選ぶ。
⑤ ストーリー中心のオーラル活動	<b>Storytelling</b> を楽しみ、 <b>Joint Storytelling</b> <sup>2)</sup> で再話することで音声言語を身につける。高学年では読む活動にも続ける。
⑥ 挨拶	

②の歌の活動は、児童が英語の授業に向けて気持ちを整えるために重要なものである。高学年ではマザーグースなどの歌ではなく、“Over the Rainbow”, “Puff, the Magic Dragon”, “Catch a Falling Star”, “It’s a Small World”, “Michael, Row the Boat Ashore”, “You Are My Sunshine”などよく歌われる一般の歌を使用し、1年に2～3曲導入する。全ての歌にオリジナルの動作をつけて教えており、さらに輪唱や合唱になるように指導するときもある。

次に授業の多くの時間を割くのが③のリタラシー活動である。高学年ではアルファベットの大文字の確認から書く作業に移り、小文字を導入し、卒業するまでには小文字を4線の上に正しく、速く書けるように指導を続ける。大文字の認識が十分に発達した後に音韻認識能力を高める活動、また音素体操<sup>3)</sup>という活動を行う。このような活動を通してアルファベットの文字、特に小文字の認識と音素認識能力を高めた後、フォニックス的な活動を行う。その際、特にライムを使い、子音、短母音、長母音、二字一音を導入し、単語を読み、書くことができるように指導する。

④のCLIL的な活動としては、例えば取り扱っているお話が『赤頭巾』だとすると、それにあわせて「狼」について学習するというものである。児童は、狼の大きさ、走る速度、またはネコ科かイヌ科等、狼の生態について英語で情報を聞きながら考えていく。英語を勉強するのではなく、英語を通してこの場合は「狼」について学習するのである。

最後に⑤の活動では、**Joint Storytelling**(ジョイントストーリーテリング)という筆者が開発した独特の手法で音声言語を育てている(注2参照)。児童は初めモデルとなる**JTE**である筆者の英語をとにかく真似るだけであるが、途中から「わかった!」と言い始める。授業では日本語に訳しているわけではないので、この「わかった!」は「先生、もう独りでもできるよ」という児童の意思表示と捉えている。子どもたちの中に英語が入っていき、それが彼ら自身の言葉になっていき、自分のものとして言葉が発せられるときに「わかった!」と思うのではないかと筆者は解釈している。児童は英語を言うことで初めて、言葉の深さに出会い、言葉を自分のものとしていく。

### 3.2 レッスンプラン

ここではカリキュラムの全体像を理解してもらうため、高学年対象の代表的なレッスンプランを時間軸に沿って紹介する。最初の授業のプラン、中間時点の授業プラン、そして最後

の授業のプランであるが、5年生、6年生ともに紹介し、それぞれについて簡単に説明する。レッスンプランは担任に電子メールで送り、レッスンプランの「備考」欄に担任へ伝えたいことを書くようにしている。

### 3.2.1 5年生のレッスンプラン

A 小学校に関わり、初めての授業であった。この年は5年生の2クラスを学級担任とともに担当したが、それぞれ38名、37名と大人数のクラスであった。まずは、表2に5年次最初のレッスンプランを報告する。

表2 5年生1回目の授業プラン（4月22日の授業）

時間	活動内容	備考
① 10分	挨拶 歌 自己紹介	Hello. What is your name?
② 15分	アルファベットの読み方をチェックする。 アルファベットのチャートを見ながらアルファベットの歌を歌う。 アルファベット文字の色を使って stand up, sit down のゲーム。 アルファベットを逆から歌う。	アルファベットカード (各児童にアルファベット表と相当するアルファベットカードを準備)
③ 15分	世界のアルファベット文字 国の名前と挨拶	チャート
④ 5分	時間が余れば‘Goldilocks and the Three Bears’のストーリーテリング	Big Book

①の活動として、最初に英語の挨拶の仕方を教えた。「Say “hello” to Mrs. Allen.」と、それぞれの単語を言いながら右手で左手の5本指を1つずつ単語にあわせて指しながら教えるという方法を取った。文字を使っているわけではないので、指と単語をあわせることで記憶の定着を図ったのである。歌は簡単なものであるが、American Sign Language を用い、こちらでも動作をつけて記憶の定着を図った。②のリタラシー活動ではアルファベットの大文字の読み方を指導した。目標としては「大文字の字形と名前を一致させる」という基本的なスキルを身につけることである。③ではアルファベットに興味を持ってもらうため、スペイン語、ギリシャ語、イタリア語などのアルファベット表と英語のアルファベット表を見比べ、それに関する活動を行った(詳しくはアレン玉井, 2010, p. 186)。またこの活動に関連させ、国の名前や挨拶、国旗などを取り扱った。④はこの年導入した‘Goldilocks and the Three Bears’のストーリーテリングであった。次にこの年度の半ばに行われた授業のプランを表3に紹介する。

表3 5年生12回目の授業プラン（9月30日の授業）

時間	活動内容	備考
① 10分	挨拶 歌	Hello の歌で4～5人の子どもを当ててください。
② 18分	1. チャートを見ながら歌を歌う。1回 2. 小文字の確認 (What's this?) 3. 児童用のカードをめくり、チャートに並ばせるゲーム。 自信のない子どもはアルファベットの順番に並べておいてもよい。 4. Show me. 活動 5. アルファベット音素練習	子どもの中には小文字になると全然できないと思いやる気をなくす子どもがいます。丁寧に教えなければならぬと感じています。でも、やはり1回目よりは2回目、それなりに進歩している姿にも驚かされます。
③ 15分	‘Goldilocks and the Three Bears’ の Joint Storytelling	発表の形態を具体的に考えます。
2分	挨拶	

①では4月から歌っている歌を、このレッスンまで続けて取り扱った。②では、大文字から小文字の学習に移った(活動についての説明はアレン玉井, 2010, p.179)。小文字の練習とともにこの時期盛んに音韻認識能力を伸ばす活動を行っている。③では、児童はジョイントストーリーテリングができるようになっており、最初から全てを言わせているため長い時間がかかっている。最後に5年次最後のレッスンプランを表4で紹介する。

表4 5年生26回目の授業プラン（3月3日の授業）

時間	活動内容	備考
① 5分	歌 “Sing” 手話 American Sign Language	アレン担当 (WEBの動画を使います)
② 5分	1. チャートを見ながらアルファベットの音素を確認。 2. 児童用のカードをめくり、チャートに並ばせるゲーム。	小文字チャート 先生の担当
③ 12分	3. アルファベットの小文字カードを使い、小文字と音との関連を確認。 4. 単語作りゲーム ライムを使いフォニックス an, at, ig, it, op, ot, en, et, up, ug を導入し、基本的な短母音学習を終了する。	先生の担当 What's the name of this letter? How about the sound? 文字は適当に選び、全てはしません。 (12個程度)

④ 13分	5. ‘Goldilocks and the Three Bears’ の読み 一度終わったので全体を対象にします。 6. 文作りゲーム 7. 語彙ゲーム	アレン担当 ゲームのときは児童の指名をお願いします。 今回は音ではなく「お題」を決めてやります。今回は「緑のもの」、「肉食動物」です。
⑤ 10分	8. <i>We’re Going on a Bear Hunt</i> 9. “Rock My Soul”	どちらにしましょう？

①では“Sing”に手話をつけて歌う指導を行った。②では担任が中心になり小文字の字形の認識を丁寧に指導した。③では、それまで行ってきた音素体操からフォニックス指導に移り、児童は音素にあわせて文字を選ぶことができた。ここではライムから単語を作る学習をした。④では、口頭で十分に言えるようになった‘Goldilocks and the Three Bears’の原稿を読む活動をした。また語彙ゲームでは「お題」を決めて、単語を言い合うゲームをした。残りの時間の⑤では、歌“Rock My Soul”を歌うか、絵本 *We’re Going on a Bear Hunt* を読むかを担任の先生に尋ねたが、当日は絵本を読んだ。

### 3.2.2 6年生のレッスンプラン

5年生で担当した2つのクラスの児童を6年生も引き続き担当したが、1つのクラスは学級担任が変わった。5年生同様に年度の最初の授業プラン、中間時点の授業プラン、そして最後から3週間前の授業プランを紹介する。6年生になって大きく変化したことは「書く」作業を入れたことである。後半はワークシートを導入したが、ワークシートはこれ以降いろいろな形で発展させ、振り返りや自己評価の要素も加え、授業の中で積極的に使用していった。表5は6年次最初の授業プランである。

①～③の活動は5年生の最後のものと全く同じである。春休みがあったため、児童が学習内容を忘れていた可能性もあり、また復習の必要性もあったので全く同じ活動を行った。④では Leo Lionni が書いた *The Alphabet Tree* を使って、文字、単語、文の関係について説明した。⑤も5年生からの引き続きの活動であり、「赤い色のもの」「白い色のもの」などテーマを決めて、グループごとに適切な単語を探すという語彙ゲームを行った。⑥は Shel Silverstein の書いた、日本語でも『おおきな木』として親しまれている *The Giving Tree* を読んだ。次にこの年度の半ばに行われた授業プランを表6に紹介する。

表5 6年生1回目の授業プラン（4月14日の授業）

時間	活動内容	備考
① 5分	歌 “Sing” 手話 American Sign Language	アレンもしくは先生？
② 5分	1. チャートを見ながらアルファベットの音素を確認。 2. 児童用のカードをめくり、チャートに並ばせるゲーム。	小文字チャート 先生の担当
③ 8分	3. アルファベットの小文字カードを使い、小文字と音との関連を確認。 4. 単語作りゲーム ライムを使いフォニックス an, at, ig, it, op, ot, en, et, up, ug を導入し、基本的な短母音学習の復習をする。 (書きたい児童には書かせてあげようかと思っています)	先生の担当 What’s the name of this letter? How about the sound? 文字は適当に選び、全てはしません。 (12個程度) 書くところはアレンが担当します。
④ 8分	<i>The Alphabet Tree</i> を使って今までやってきたことを確認する。	アレン担当
⑤ 5分	語彙ゲーム	赤い色のもの 青い色のもの (先生も考えておいてください)
⑥ 9分	時間が余れば <i>The Giving Tree</i> を読みます。	アレン担当

表6 6年生13回目の授業プラン（9月8日の授業）

時間	活動内容	備考
① 7分	歌 “It’s a Small World”（手話付）	アレン担当
② 10分	文字活動 1. チャートを見ながらアルファベットの音素を確認。（音素体操） 2. 文字カードを指しながら、音と文字の確認。	学校行事に関する活動の解説のため ワークシートはしません。
③ 15分	代名詞 one の使い方 Which do you want?	16 monsters を使って代名詞 one を学習する。
④ 8分	‘Jack and the Beanstalk’ Joint Storytelling	アレン担当 最後のところの復習 JS 用のワークシート



①では、8回目の授業から導入した“*It’s a Small World*”の歌を、手話を交えて練習した。②では、5年生から続けている文字と音との関連を子音中心に復習した。③ではネイティブの人たちとの交流を想定した言語活動を行った。当該地域では、英語活動の一環としてネイティブの人たちとの交流会が催され、児童はそれに参加することになっていた。その準備として③を行ったので、通常の活動とは異なるものであった。④ではこの学年の児童は‘*Jack and the Beanstalk*’の Joint Storytelling を6回目の授業から始めており、7回目のこの段階では全体の3分の1程度の内容を練習していた。最後に6年次の最後から3週間前の授業プランを表7で紹介する。

表7 6年生27回目の授業プラン（1月27日の授業）

時間	活動内容	備考
① 7分	歌 “ <i>It’s a Small World</i> ” (1回目スライドを見ながら歌詞を味わう。2回目手話付で歌う)	PCとプロジェクターは持って行きますが、念のためプロジェクターのご用意をお願いします。しっかり手話ができ声ができるようにご指導お願いいたします。
② 15分	文字活動 1. チャートを見ながらアルファベットの音素を確認。(音素体操) 2. 文字カードを指しながら、音と文字の確認。 3. 小文字の高さ確認 4. 単語練習 5. ワークシート	テンポを大切に。(ワークシートの解答) (1) witch ⇒ switch (2) dog ⇒ frog (3) where ⇒ there (4) Don’t do that! (5) Don’t worry. (6) Don’t sleep.
③ 6分	‘ <i>Jack and the Beanstalk</i> ’	1組と2組で適当に場面を選択し(発表当日のものも含まれていてもいいと思います)、行ってください。
④ 12分	<i>The Selfish Giant</i> by Oscar Wilde	時間が余れば行います。

①では、歌い続けてきた“*It’s a Small World*”にあわせて筆者が作成したパワーポイントの映像を見せ、自分たちが住んでいる世界について考える活動を展開した。②は毎回行ってきたリタラシー活動であるが、大文字、小文字の学習が終わり、子音、短母音、長母音を学習し、単語理解を深めた。またワークシートを活用して、ライムを利用して単語を書いたり、‘*Jack and the Beanstalk*’に出てきた文を書く練習をした。③では、取り組んでいた‘*Jack and the Beanstalk*’の Joint Storytelling を全体を通して練習した。④では、最後のお話として Oscar Wilde が書いた *The Selfish Giant* を3回に分けて読み聞かせた。

#### 4. 担任教員の反応

児童は5年生の後半あたりより、フレームワークおよびルーティン化された活動に慣れ、

安心して授業を受けるようになったが、それについて担任は次のように考えていた(原文のまま掲載)。

- \* 1時間の学習の見通しが持て、活動の説明をしなくても子どもたちが安心して進んで授業に取り組むようになった。
- \* 繰り返し学習することで、一人一人の理解が深まり、英語が定着した。
- \* 何度も行うので、子どもたちが自信を持って学習に取り組めるようになった。すぐにできなくても繰り返し行えばできるようになる、ということが分かり、学習に対する態度が育った。

またリタラシーや単語指導については次のような感想を持っていた。

- \* 最初は書けなかったり、文字の区別がつかなかったりした子でも、6年生の後半ではほとんどの子が書けるようになっていたので、力がついていると感じた。書きたい子は、たくさん書きたがっていた。
- \* カードでの単語作りが好きだ、またやりたいと言っていた児童が多く、児童は単語を学習することにはとても興味をもっていた。単語作りゲームのために、前もってスペルを覚えていつか披露しようとしていた子もいた。個々で取り組んだワークシートも、単語の読み書きのやり方に慣れてくると自然に書けるようになっていたと思う。

最後に、意味ある文脈で英語に接して欲しいと願い導入した、ストーリーを使った授業については次のように考えていた。

- \* リズムがついていることで、一度インプットされてしまえば相当頭に英語が残り、何かをきっかけにフレーズが丸ごと出てくるので、単なる暗記とは違い、すごい学習方法だと思っている。自分自身も最初は四苦八苦したが、必死にならなくてもいつの間にかストーリーが頭に焼きつき、自然にでてくるようになったので、自分でも驚いた。子どもは覚えるのが早いので、なおさらだったと思う。

## 5. まとめ

本論文では筆者が開発した英語教育プログラムを実施した公立小学校での2年間のレッスンプランの説明と、指導を共にした学級担任の反応および、学級担任の反応からみえる児童の英語スキルの発達を報告した。指導した者としては週1回という限られた英語学習環境の中で児童は大変熱心に学習を積み、期待した以上の成果をあげてくれた。専門的な知識を持つ者のサポートは必要であるが、公立小学校でも十分にスキルを伸ばす英語教育は可能であることを証明してくれた。これは当然ではあるが、学級担任の協力なくしては起こりえないことで、筆者と学級担任の間では多くの問題を解決し、その過程において英語教育に対して同じ目標を持つにいたった。最後に学級担任の意見を引用し、「学び」を求めて授業作りに取り組んだ研究のまとめとする(原文のまま掲載)。

私はこの学校に6年間いて、リソース(当該地域で作成された英語教材)中心の時代や、日本語でフレーズのみあてを提示する時代、ALTにある程度任せる時代や教師が中心となって授業する時代など、あらゆる変化をみてきました。

そこで言えることは、「4年生くらいになると、ゲーム活動などで楽しめなくなる子、ふざけてしまう子」が、アレン先生の授業を受けたことで「知的好奇心が満たされていく子」「英語の授業なんだという意識をもって受ける子」に変わっていくのだということです。

〇〇くんが、前は英語も話さず歩き回ってふざけていたのに、まず座って授業を受けること自体すごいですし、休み時間に英語を口ずさむなんて考えられなかったです。でも、これが結果なんだ成果なんだと私は思います。目の前にいる子どもたちの姿が成果であり、子どもたちが真実を語ってくれると思っています。

### 注

- 1) CLILはContent Language Integrated Learningの略で、教科の要素を生かして言語を教えていくという考え方である。
- 2) Joint Storytellingは意識的なスピーキング活動であり、最終的には児童と教師がジョイントして全てを再話する。子どもが発話できるレベルの英語にするが、訳すことはなく、部分的に歌やチャンツを入れて、ジェスチャーやアメリカ英語の手話(American Sign Language)を伴い、多量の英語を口にするを経験する。
- 3) 音素体操とは著者が開発したアルファベットと音素認識能力を高めるための体を使った学習方法である。アルファベットの名前を音素に区切り、それに合わせて動作を付けている(詳しくはアレン玉井, 2010, pp.190-191を参照)。

### 参考文献

- British Council (2014). 「文部科学省と英語指導力向上事業で連携」  
Available: <http://www.britishcouncil.jp/about/press/20140516-mext-teacher-training> [2014年10月]
- Bruner, J. S. (1978). The role of dialogue in language acquisition. In A. Sinclair, R. J. Jarvella & W. J. M. Levelt (Eds.), *The Child's Concept of Language*. New York: Springer-Verlag.
- Bruner, J. S. (1983). *Child's Talk: Learning to use language*. Oxford: Oxford University Press.
- Cameron, L. (2001). *Teaching Languages to Young Learners*. Cambridge: Cambridge University Press.
- アレン玉井光江 2010. 『小学校英語の教育法—理論と実践』 大修館書店.
- アレン玉井光江 2014. 「公立小学校におけるストーリーを中心にした授業の実践—音声言語の発達—」『ARCLE REVIEW』No. 8, pp. 46-55. Action Reserch Center for Language Education.
- 文部科学省 2008. 「小学校学習指導要領解説外国語活動編」  
Available: [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/)

icsFiles/afieldfile/2009/06/16/1234931\_012.pdf [2014年10月]

文部科学省 2013.「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」

Available: [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/25/12/\\_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458\\_01\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf) [2014年10月]

文部科学省 2014.「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業」

Available: [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/102\\_1/shiryo/\\_icsFiles/afieldfile/2014/08/07/1350490\\_01\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/102_1/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2014/08/07/1350490_01_3.pdf) [2014年10月]

文部科学省 2014.「平成 26 年度英語教育推進リーダー中央研修実施要項」

Available: [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/102\\_1/shiryo/\\_icsFiles/afieldfile/2014/06/26/1348788\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/102_1/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2014/06/26/1348788_01.pdf) [2014年10月]